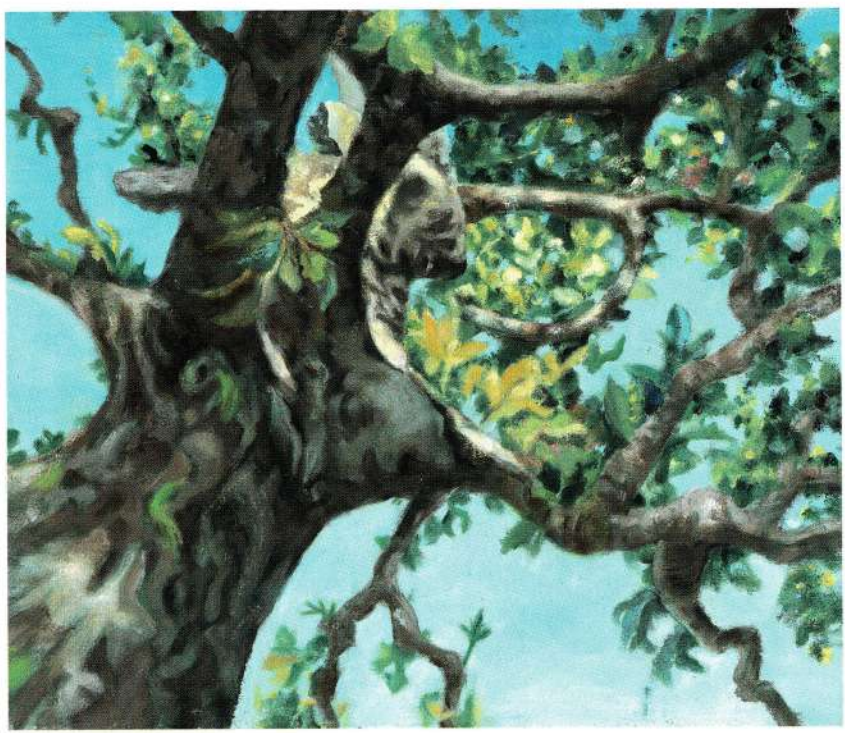
村野次郎創刊

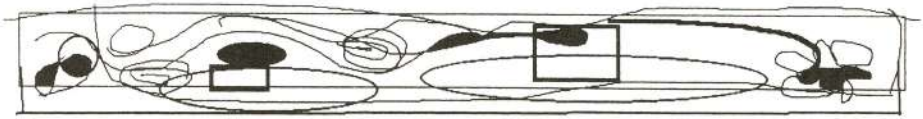
香蘭



2023年(令和5年)1月号

第 100 巻　　第 1 号　　通巻 1105 号

二〇二三年(令和五年)一月一日発行(毎月一回一日発行)　香蘭　第一〇〇巻第一号



香　　蘭

2023年（令和５年）１月号
第100巻　第１号　通巻1105号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（89）……丸山　三枝子……表二
２０２３年　年頭メッセージ「歴史と伝統に磨きを」……千々和　久幸……２
作　品
一……３
二……23
三……29
推薦香蘭集……36
香　蘭　集……37
社告　昇格者発表……14
一頁公論（20）二つのお話……犬山　俊昭……15
作品一特選（十一月号）……飯島・石井・伊藤（美）・岡野・斎藤・関口（静）・谷本・牧野・満木・森田……16
作品二、三特選（十一月号）……丑山・江口・庄司・高田・田中（あ）・安田・川久保・河野・澤田・篠永・三神……18
村野次郎への旅（１５３）……千々和　久幸……20
七　首　抄（十一月号）……室橋・大島・城・市川……41
私の読む現代短歌（17）前　登志夫の壮大な目論見……田中　あさひ……42
エッセイ・自由研究　隠岐の新島守……小笹　岐美子……44
耳言あれこれ（14）……田中　あさひ……47
焦　点（十一月号）日々を生きる、短歌（うた）の向こうに……鈴木　桂子……48
作　品　評（十一月号）作品一……渡辺　礼比子……50
作品二……田中　あさひ……52
作品三……満木　好美……54
香蘭集……伊藤　康子……56
緑　地　帯……伊藤（康）・後藤・穂積……58
明宝研究会　第一三三回十月例会　会員の選んだ感銘歌……庄司　健造……62
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……66
歌会及び会合・会員消息・他……72
編集後記・新宿日記……77
令和五年度香蘭賞作品募集……表三
表紙絵……中村　陽子「春ひかる」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（89）

箱根路の新緑の下友らゆく共に老いづく
くつろぎもちて

『村野次郎歌集』

丸山　三枝子

『村野次郎歌集』の、「箱根の旧友会」の連作八首の掉尾に置かれている歌である。

昭和三十九年の作品だから、作者が古稀の時の歌だ。〈おのおのの人生持ちて集まりし旧友同じ丹前を着つ〉の歌があるから、古稀を祝う旧友会だったかも知れない。

この歌の下句は、いとも平明に詠んで、さまざまのことを思わせる懐の深さがある。

当時の古稀と言えば、人生の第一線を引いた後の「くつろぎ」の年代で、老いづくほどに無欲恬淡の心境に至ったのだろう。時代の落差はあれ、今のわたしたちの古稀とは心身ともに感じ方が違うような気がする。

代表は老成願望と書いておられたが、村野次郎先生の歌には、青年期からすでに大人（たいじん）の風格があった。

この歌の平明な下句からは、そんな作者の分厚い人生と、時代の落差が窺える。

（短歌研究文庫『村野次郎歌集』84頁、『村野次郎三百首』には掲載されていない）

――2023年　年頭メッセージ――

歴史と伝統に磨きを

「香蘭」短歌会代表　千々和　久　幸

明けましておめでとうございます。世間は地球の終末を思わせるような悲観的で、気の滅入るようなニュースばかりですが、新宿の一角には「香蘭」の明かりが仄かに灯っているような思いで新年を迎えました。そんな気持で新たな年を皆さんと共に駆け抜けたいと念じております。

さて「香蘭」誌上でもたびたびお伝えしましたように、本年度は愈々創刊一〇〇周年の節目の年を迎えます。あなたもわたしも、よくぞ生き延びてこの晴れの日に間に合ったという思いでしょう。正確に申し上げれば、創刊号が出たのは大正十二（一九二三）年三月一日、東京市外淀橋町角筈九二を発行所とし、編輯兼発行者田中次郎、発行所香蘭詩社というのがその産声でした。

爾来一〇〇年、時移り人は変わりましたが、田中（村野）次郎が高く掲げた「気品と格調」を基調にした短歌の灯は、営々として今日に受け継がれて参りました。すでに記念事業は動き始めておりますが、記念特集号の発刊は２０２４（令和６）年３月号、記念式典を組み込んだ全国大会は同年５月に開催を予定致しております。

「香蘭」の現在の作歌指針は「詩による新しい自己の発見」であり、運営レベルでは「世界でもっともエキサイティングな結社」という願いです。皆さんが短歌の道に迷われることがあれば、いつでもこの原点に立ち戻ってほしい。

現在も結社の存立基盤は、作歌修業の場であると共に会員の交流の場でもあります。平たく言えば、作歌力向上と同時に人間としての相互啓発の場でもあります。幸い研究団体である明宝研究会はじめ各支部の歌会も健在です。歴史と伝統は伊達ではない、という心意気を一〇〇周年を期にさらなる高みへ導き、磨きをかけて参りましょう。

四選者の作品

会ってやらねば

平塚　千々和　久幸

顔のなき人ばかり行く雑踏に紛れてわれも顔を失くせり
諦めねばならぬこと増え蝋梅の花開きたり秋の日射しに
「辛うじて息してるよ」と留守電に残りておりぬ　会ってやらねば
見立てより見かけが大事マスク取り女人の来るを矯めつ眇めつ
溜息を吐き眺めおり女生徒のこれ以下はないスカートの丈
代官町なぎさ通りにある歯科医木槿の花を垣に咲かせて
窮すれば核を使うと脅しくるロシアの狼少年可愛い
五十年ともに在りしが思い出す妻の記憶は切れ端ばかり

性悪説

横浜　渡辺　礼比子

バレエ見てキャビアをみやげに買わんとてロシアの旅を夢見しかの日
ロシア文学読むがわれらの教養の証なりけり高校時代
独裁者蔓延る世にて生徒らは性悪説こそ教わるべけれ
親戚に中国人を殺めたる人おり　戦争はそういうものか
この年の最後のゴーヤ黄熟し崩えてひっそり葉隠れにあり
葉山より見はるかす海の彼方なる伊豆半島美しわが父祖の地よ
富士山にかかる横雲虹色に輝きて夫は小康保つ
口裏をあわせて父に病名の「癌」を隠しき父の時代は

秋の川

鎌倉　高畠　憲子

まだ暑き街路に色づき始めたりムラサキシキブの実のむらさきは
「秋だね」と金木犀の写メールのポロンと届く香り無きまま
青森の大き帆立は箱中に息づきてをり藻をつけしまま
息づける帆立に気づかれないうちに素早く銀のへらを差し込む
観念の体にて大きく口を開け帆立の並ぶ秋のキッチン
焼きたての帆立にジュッと酢橘ふる秋はここから始まつてゆく
身のほとり詠むがよろしとメール来ぬ今日の我が身は秋の川なり
暑ければ脱ぎ寒ければ着ればいい　川の流れに沿ひつつ歩む

風の盆

我孫子　丸山　三枝子

三年ぶりの旅人として富山駅改札口に集えりわれら
部屋ぬちに舞いを堪能しておりぬ〈越中八尾おわら道場〉
編笠に貌をかくせる舞いびとは三日三晩を練り歩くとう
音に聞くおわら風の盆　目の当りに舞い奏でるを観て味わえり
女踊り男踊りを繰り返し女とおとこ狂うがに舞う
石垣と坂の町すじ行きながら石垣作りの家多く見つ
八尾にて終戦むかえし吉井勇と聞きつつ辿る秋の町すじ
干し柿を軒に吊して八尾なる諏訪町通りに秋がすぎゆく

作品一特選

（十一月号作品から）　　髙畠憲子選

甲府の空襲　　川崎　飯島　智恵子

終戦は七十七年まえのこと　そのとき私は八歳だった
いまさらと思えどロシアの侵攻が思い出させる甲府の空襲
教科書を入れた大事なずだ袋夜毎おきたりわが枕辺に
くりかえし名前をよばれ目覚めれば姉の笑顔が間近にありぬ
半睡の身はたよりなく姉の手にひかれ入りゆく防空壕に
閃光の走るせつなに噴煙の高くあがれり甲府の空に
「安子（やす）が困る　とし子が困る」と口走り狼狽（うろた）う母の姿いたまし

・ロシア侵攻に蘇る自身の戦時体験。これを詠み伝えることも反戦。

青き味する　　習志野　石井雅子

そら豆はうすみどり色に茹であがりまことに青き味がするなり
耳たぶの固さに白玉粉こねてゐる福耳だつた夫思ひつつ
歳重ね丸くなつたと言はれるは背中のことで人柄ぢやない
若者の野太き声の合図にてゴミ収集車ゴミを呑み込む
病院に通ひし夏を思ひ出す紺の日傘をさして歩めば

・二首目、白玉粉をこねる作業から亡き人を思い出す。五感の鋭さ。

白雲の果て　　川崎　伊藤　美恵子

穏やかに夫は手術を拒みたりもうじゅうぶんに生きたと言いて
さよならは言わないいつもいっしょだよ水無月柩の蓋閉じられて
夫の遺影の背後は箱根の仙石原マルクス、レーニンここには居らず
白雲の湧く駿河台当て所なく漂っていたあれが青春
ニコライ堂の鐘の音幾たびか聞きにしがニコライ堂にゆきしことなし
なにをしてもどうしようもなくつまらなくこのつまらなさに死ぬ人もある
でも短歌（うた）が残っておりますと記さるる葉書の届く　ひとすじの光

・長年連れ添い介護した夫との別れ。亡き人も歌も「いつもいっしょ」。

茗荷の花　　尾道　岡野甫江

海よりも空ぎらぎらと土用凪砂を掴めば砂の音して
藍染めの羅（うすもの）ひとつ纏ふとき内より海の風吹きはじむ
ひと雨のあとの湿りにしつとりと茗荷の花がほのかにひらく
暑き日の夕べとなれば茗荷の子くきと摘みきて茗荷汁なり
黎明を裂きて鳴きつぐかなかなにひたりゐるなり目ざめの中に

・住まいの辺りの景や生活の一こまを生き生きと描写。豊かな詩心がある。

茄子の牛　　鎌倉　斎藤　俊子

音たてて地を打つ雨粒乾きたる路面をたちまち黒く変えゆく
突然に深夜に鳴り出す目覚まし時計　そうだきのうは幼が来ていた

向い家に越して来たるはサーファーらし二台の車にサーフボード載る
茄子の牛にどの辺りまで行きたるや暮るるを待ちて送り火を焚く
一人の野望が言わせる口実のあれもこれもが爆音となる

・二首目、幼の仕業に安眠を破られ、やれやれだが、お蔭で一首できた。

爪半月　　鎌倉　関口静子

生れてより八日目となる寝顔にはアルカイックスマイル口元に見ゆ
家猫はベッドの柵に手をやりて新生児をのぞきこみたり
真昼間に赤子笑まひて見る夢は胎内にゐし蜜月の日日
天国の窓から見てゐるのだらうか夫の知らない孫の産まれて
一ヶ月の乳児の指にも出来てゐる白く小さな爪半月が
感染の六波の終はりて七波来るお借りした本返せずにゐる
明け方はとても忙しい夢の中で子供になりて学生になる

・抑えた表現ながら、初孫を授かった喜びや小さな発見が瑞々しい。

八月十五日　　神奈川　谷本朝江

夏便り七月号のわが写真笑顔なれども目は笑ってない
夫や子の魂帰りくる迎え火をホームの部屋に心で焚けり
嫁に托せる盆の行事のあれこれを案ずることも生あればこそ
慰霊碑の掃除欠かさず参加せし戦後の夫の八月十五日
共に在らば夫と食さん慣例の土用丑の日「しのざき」の鰻
一晩でしぼんでしまうサボテンに来年会えるか会えるよきっと

・盆行事を自らできなくても心は欠かさない。六首目、自分へのエール。

スニーカー　　町田　牧野道子

一万歩きのふ踏破のスニーカー春の玄関すみに寛ぐ
猛暑日の午後の歌会定刻に背筋を伸ばし笑顔が揃ふ
真夏日の公園口の改札に湧きだす人を杜が呑み込む
冷房の効き過ぐる車内に繰り返す三分遅れを詫びるアナウンス
家事の手を抜く技のみが磨かれて八十路の坂を越えんとしたり

・一首目、スニーカーに託す労り。五首目、加齢を前向きに詠む。

われの番かも　　川越　満木好美

素麺を洗いつつ恋うふるさとの出せば出すほど冷える井戸水
ふるさとを離れて知りぬどこからも立山見えた豊かな暮し
一週間ぶりの職場は様変わり熱ある人が次々に来る
PCR検査の結果は九割が陽性となる七月下旬
職場にもジワリと感染広がりて今度はわれの番かも知れず

・一首目、夏の井戸水を言い得ている。離れて思う故郷の水や山。

大恩の人　　福岡　森田　徹

退任を目出度きことと迎えなむ大恩受けしよ香山先生
師はわれの大恩の人短歌詠みて九首を送る恋文のごと
先生の教えを受けて二十六年楽しかるなり年の差を越え
人生を妻より先に閉じなむは願いに非ずわれの決意ぞ
妻かわれか一人になる日をふと思う六歳違いの妻も然りか

・長く師と仰いできた方への敬慕の心。伴侶への気遣いも滲む。

作品二、三特選

（十一月号作品から）　丸山三枝子　選

〈作品二〉

熊谷　さいたま　丑山眞弓

日本一暑い場所なる熊谷に生まれ育ちて夏には強し
裏手には熊谷次郎直実の出家したりし熊谷寺ある
有名な歌舞伎の演目で語られる直実公は熱き人なり
ひまわりの迷路で遊ぶ子供達ウクライナの地の出口を探す
青と白の混ざれる色に少しだけグレーを足したブルーな気分
元旦の一日一首の決心は夏の暑さに溶けてなくなる

・五首目の、結句の心象への持って回った五色の繋ぎ方が面白い。

一周忌　柏江口絹代

亡き夫とふわりと一緒に浮いていた一年が過ぎ今日喪が明ける
一周忌過ぎたる庭の秋明菊の去年より株の大きくなりぬ
夕風に乗りて鳴き初むひぐらしの合唱隊より一匹抜け出す
さよならを言っていないと夢の中で叫んでいるのは確かに私だ
おそ夏のつくつくほうしの鳴く家に老々介護のひとりと一人

・四首目の言外の喪失感は限りなく、悲傷の深さが夢に結実された。

八月の風　横浜庄司健造

読経の聞こえる彼岸の山門をくぐれば咲けり夾竹桃は
お彼岸の墓石に居たるアマガエル線香焚けばジャンプして去る
大山の天辺に涌くさば雲のそぞろに秋の空となりぬる
八月の尽きんとしつつ葉隠れの柿の実あまた風に吹かれて
八月のそぼ降る雨のあがるときひとすじ触れる風の涼しさ

・どれも自然の景物をリリカルに捉え、過不足なく詠み納めている。

ほほ、ほほ　鎌倉高田みちゑ

合歓の花風に揺れるよほほ、ほほと空を仰ぎて悔いなきがごと
初夏の空晴れあがり初蝉の声を聞かんと立ち止まりたり
その風を何と名付けん迷ひつつ余りに寂しかの人の風
高麗山の傾りをもりもり這ひのぼる楠の芽吹きの逞しきさま
わが孫はもういらないと言ふかはり「大丈夫」と言ふこれも日本語

・一首目のオノマトペと、五首目の結句に表現の工夫が窺える。

一番の価値　取手田中あさひ

ひよどりの声は濡れつつ仔をよべば万緑の肩あをく息づく
琥珀色かもして梅酒は人を呼ぶ老熟こそは一番の価値
あこがれの晴耕雨読よ雨の日に鴉きたりて〈阿呆〉と鳴ける
会ふ人はたぶんゐないが口も鼻も覆ひつくして畑へいそぐ
かぶと虫七匹は人を眠らせず畑より連れてもどりたる夜
日輪とともに向かうへ落ちてゆくこの世に在るもののなべては

・二首目は理になったか、三首目のアイロニカルな転換を味わいたい。

赤きベリー酒　　行田　安田恵子

そよりとも動かぬ樫の深みどり地熱がじわり身にのぼりくる
牛蛙鳴いて蟬声追いきたり暑さ重たき池の辺を行く
病む夫の不機嫌つづく日にも馴れ夜にひとり飲む赤きベリー酒
目の前をついと横切るアキアカネ近くに淡き秋が来ている
総身をフェンスにかたく絡ませて身動きならぬ昼顔の咲く

・一首目、二首目、五首目に表現された粘着質な描写に惹かれた。

〈作品三〉

長い莢　　川口　川久保百子

宿題を隅へ押し遣る遠き日のブロンテ姉妹と加山雄三
朝顔は小さくなりて色淡き空色の花を猛暑に咲かす
〈事実婚〉なんと都合の良い言葉生まれ変わったらこれがよさそう
藤棚の花の名残りの長い莢葉陰にありてなんにも言わず

・四首目の、藤棚にぶら下がる幾つもの莢は何やら物言いたげだ。

夏の雲　　鎌倉　河野慎二

歌はねばなべて消えゆく新宿の娼婦を照らししかの街灯も
くるくると襷をかけたるわれはいま猫の食事の片付けに入る
しあはせの簡単レシピ君がさう思へばたちまちきみは幸せ
後ろ手を浜につくなり見つけたりけふの気分に合ふ夏の雲
部屋中を花で飾らん悩ましきことを抱へてしまひし夜に

・二、五首目の写実の歌と、三、四首目の写実を変形させた歌との間で模索している。

シャガールの空　　島根　澤田久美子

晩夏光ややに翳りを見するころ庭の楓に風生まれたり
シャガールの描きし空をとびたくて窓開け放つ立秋の朝
朝露に冷えしトマトを両の手に抱へて畑より戻りし母よ
かすかなる葉擦れの音に亡き人の足音(あのと)をしのぶ盂蘭盆の夕
交差点をゆきかふ車ながめつつ茶房で過ごす　時にはいいか

・一首目の、夏から秋への移行を詠む下句の丁寧な描写に共鳴した。

夏みどり　　川崎　篠永路子

夕立は遠い昔のこととなる　あたりまえだと思っていた夏
せみしぐれ茶の薄みどりに夏山の濃みどり映ゆる　みどりに溶けたし
西陽差すガラス工房立ち並ぶガラスも染まり夕焼けの国
永遠の幸せのごと常磐木は緑ふかぶかと時を飲みこむ
きつね坂をぐるり登ればバス停のありてそこからまた坂となる

・五首目の「きつね坂」には、愉しく化かされてみたい気持ちになる。

木陰の幼児　　愛知　三神進

陽の陰る木下にベビーカー預けおくママ友二人へ児の大欠伸
せかせかと主を引いた小型犬行き交いざまのチラ見は強気
吊革の脇で見事な指捌きスマホの画面が踊る弾ける
薬局の店の名なぜか花や草順番待ちの「たんぽぽ」の椅子

・二首目の小型犬が人間に思えてくる。こんな人っていますよね。

村野次郎への旅（153）

大正期の「香蘭」（十四）

千々和　久幸

「香蘭」大正十五年（1926）七月號は、七月一日に発行された。順調に巻を重ねてこれが第四巻第七號である。表紙畫及題字、裏畫は引き続き北原白秋の手になる。本誌58頁は前号と同じである。

目次から見て行けば巻頭の短歌欄には次の十名が出詠、村野次郎、酒井廣治、橋本敏夫、今井嘉雄、本間楽寛、冬野木枯、南草萌、橋本政一、島田旭彦、杉浦翠子。

次いで杉浦翠子のエッセイ「女性の叫び」を挟み、二番目の短歌欄には十一名が出詠している。南部松若丸、川村浩、芥子澤新之介、松丸貞一、東朱雀、成田憲三、富永置三、河野紫行、山野芩樹、日根まもる、眞島勝郎、がそれである。

以下は橋本敏夫のエッセイ「象徴論」、文月集（短歌）に十二名が出詠、前月歌壇合評（杉浦翠子、酒井廣治、矢代東村、村野次郎）、螢光集（短歌）に十七名、夏草集（短歌）に三十一名がそれぞれ出詠、内容的には例月と大差はない。

例によって巻頭の村野次郎作品から目を通していこう。

夏來る頃　　村野　次郎

①歸り來て靴ぬぎ居れば夕土間のかたへによりて寝につくひよこら

②ともしびのとどかぬ土間に居る雛のをりを鳴くはめさめ居るらしき

③一日遊びよく疲れけむ夕飯の箸を持ちつつ居眠むるをさなご

④口を清めむかふ朝餉の瓜もみの匂ひすかしき夏となりにけり

⑤柿の木に來てとまりたる子雀のおぼつかなくも風に吹かれゐる

⑥暇もちて畫湯に入れり硝子戸にせまる青葉の肌にうつらふ

気負いも衒いもない日常に即した、いつもの平明な先生の詠み口である。

③の「をさなご」は中村富美子現発行人であろう。この居眠りには一日の遊び疲れのほかに、帰宅した父に会えた安堵感もあったのだろう。

『村野次郎三百首』には「妻病みてひとり遊べるをさなごにさくらの花をとりて持たすも」（大正十三年、『夕あかり』）、大正十五年には「妻の忌に人らつどへりをさなごの年端ゆかねばよろこべるらし」（同）が採られている。読み返して今に憐れ深い。

④の歌、季節はまず食感からという訳ではあるまいが、先生らしい慎ましい夏への思いである。先生には他に漬菜に箸をつけた時の春を待つ印象深い一首、「箸にとる漬菜の中に花芽見えそこまですでに春は来てゐる」（昭48、『角筈』所収）がある。

⑥の歌、畫湯と青葉の取り合わせが爽やかな感じを与えるが、『明宝』には次の一首がある。「実によきこの風呂加減ふしぶしにこごるひと日の疲労をほぐす」、まさしく肩の凝りを

ほごしてくれるような、万事を言い尽くして余りある歌である。

村野先生は32歳、ちなみにこの期の北原白秋の年譜（高野公彦編『北原白秋歌集』）を重ねてみれば、こんな記述が見える。

一九二四（大正一三）年　三九歳
四月、短歌雑誌『日光』を創刊。同人は白秋の他に前田夕暮・土岐善麿・木下利玄・川田順・吉植庄亮・釈迢空・石原純ら。
この年、小唄集『あしの葉』、『お話・日本の童謡』を刊行。

一九二五（大正十四）年　四〇歳
六月、長女篁子誕生。八月から九月にかけて、一カ月にわたって樺太・北海道を旅行、帰途、松島に遊ぶ。（一九二八年、紀行文『フレップ・トリップ』刊行）

一九二六（大正一五）年　四一歳
五月、小田原生活を切り上げて上京、下谷区谷中天王寺町（現・台東区）に転居。一一月、詩誌『近代風景』を創刊。
この年、詩文集『風景は動く』を刊行。
高野公彦編『北原白秋歌集』（岩波文庫は1999年5月17日刊行のもの）

詩人としてまた文学者として白秋のもっとも脂の乗りきった時代ではなかったろうか。一方の次郎も倦まず弛まず白秋のもと、歌を詠み「香蘭」を発刊し続けた。

次郎に限らず白秋膝下の「香蘭」人は、白秋の『桐の花』（一九一三）、『雲母集』（一九一五）、『雀の卵』（一九二二）はすでに知悉していた筈だが、師風を継ぐという意識はあまり感じられない。彼我の文学的才能とその覚悟には、傍目には窺い知れぬ落差があったのであろう。

それは白秋が「香蘭」と訣別するときの言葉にも明らかである。

さて今月は編輯後記を先に読もう。

今年も半ばになり、此際の事でもあるのでご多忙中とは思つたが、表紙、裏繪共に北原先生にお願いした。表紙繪は先生の谷中天王寺のお庭に今咲いてゐる、がくの花である。紙質も吟味し、色も四度刷りにした。今の歌壇にも此位簡素にして氣品ある贅澤な表紙は一寸見當るまいと思ふ。先生の香蘭に對する御厚意を常に難有く感ずる。

○

諸君の熱誠により甚しい新會員の増加を見た。此分でゆくと小生一人で到底選がしきれなくなるかも知れない。此の中から漸次新進の人達が出て來るかと思ふと喜ばしい。

投稿歌の原稿用紙もいづれ一定したいと思ふが今のところは、半紙判の原稿用紙に丁寧に認め數枚に渉るときは必ず綴り合せ置くこと。自己の作品を取扱ふには細かい所まで注意をする必要があらう。其が出來ぬ様なことで歌道の上達は望めまい。

○

今月から歌談會をすることにした。其第一として香蘭の合評をした。本誌掲載のものがそれである。今後歌壇のいろいろの問題を論じてゆきたいと思ふ。　（次郎）

○

ついで六號雑記の冬野木枯「酒酔感」を。（寂しい）といふ詞を歌に入れる事が多い、歌をつくる時、いよいよ、辭句に窮するとこの（寂しい）が引つぱり出される。

好都合の事には、どこへ引つつけても大概無難である。（悲しい）も同類である。極めて樂天家でゐながら、歌をつくる時は、悲しい、寂しい、を連發する事は珍の圖でもないだらう。又こう感傷的にしないと、歌や詩にならないと考へる人間も多い事であらう。